

寒冷地生物資源の利用に関する研究
(事後評価)

質問

回答

A委員	このテーマは、国庫補助事業ですね。超臨界は高温高压なので、利用法が難しいのではないですか。コストはどうですか。	経済産業省の国庫補助事業です。水系の超臨界は温度が高い関係で利用は難しい面もあります。二酸化炭素の超臨界は室温に近いので熱量が少なくて済み、利用しやすいものです。ただし、両方ともですが、ある程度の大きさになると初期コストが高くなります。
C委員	コストはしょうがないと思います。研究としては良いのではないのでしょうか。スクリーニングの結果、いいものが出たら、伸ばしていった方がよいと思います。データから抗酸化性は高温高压のほうがよく、抗アレルギー活性は100度でもいいことが読みとれましたが、超臨界で効率が良くなるものであれば製品化に進むのではないのでしょうか。成分は見当がついているのですか。	ヤーコンは糖タンパクであるといわれています。
B委員	ヤーコンは県内のものですか。ものになるか判らないけれども、使われない農産物の葉なども試した方がよいと思います。	ヤーコンは陸前高田地区で栽培されています。来年度の事業でもいろいろと試していくつもりです。
C委員	農研センターで行われている抗酸化などのデータも参考にされれば良いでしょう。	わかりました。
A委員	今回は、国庫補助の都合もあって調味料を作ったようですが、実際にはコスト的に合わないでしょう。1g何万円の薬品を狙わないといけません。	今回の事業で、超臨界抽出の装置と技術を導入できました。今後、薬品も考えていきます。
B委員	青森でも山菜などを行っています。こういうものは早い者勝ちです。	そう思います。
C委員	超臨界温度200度ではサンプルは焦げるのですか。水蒸気で焼くということとは違うのですか。	200度になると、ものによっては焦げます。超臨界は、いわゆる過熱水蒸気とは異なります。